

コロナ禍の困窮浮き彫り

米軍基地での新型コロナウイルス感染症のクラスター（感染者集団）発生が報道された7月中旬、沖縄県へ飛んだ。那覇市の繁華街、国際通りはシャッターを閉めた店が目立ち、閑散としていた。タクシー運転手に話を聞くと、売り上げは従来の10分の1。コロナ禍は観光業を直撃していた。

ここ沖縄の貧困率はかなり高い。日本全体では7人に1人の子どもが貧困に苦しむ。だが、それが沖縄では3人に1人の割合。だから無償や低価格で食事を提供する子ども食堂が多い。その一つ「子ども広場in那覇」を訪れた。

平日の午後3時半。教室ほどの広さの部屋に大型テレビと漫画の並ぶ本棚、その奥にキッチン。既

那覇の子ども食堂 雨宮さんルポ



雨宮凜さんの携帯電話で写真を撮る子ども。奥は細田光雄氏＝那覇市の「子ども広場in那覇」

に子どもが3人来ていたが、4時を回るとその数は10人を超えた。子どもたちは入ってくるなり漢字プリントで勉強し、それを終えると思いいいに過ごす。男の子は

高齢者や失業者も支援

テレビの前でゲームに歓声を上げ、女の子がボール遊び。キッチンからは、包丁の音と香ばしい炒め物の匂いが漂ってきた。メニューはひき肉、ニンジン、卵の三色そぼろご飯とサラダ。

ここができたのは2016年。代表理事の細田光雄氏(65)が始めた。「私自身、貧しい子ども時代を過ごしたことが大きい」。働かない父親に愛想を尽かして母親が家を出て、半年間ほどともに食べられない状態が続いたのは、小学4年生の頃だった。

「弁当を持っていけないので、昼は水を飲んで済ませた。親戚の畑の芋を食べたりもした。3日くらい食べてなくて学校で倒れた時、先生が100円をくれて。そのありがたさを強烈に覚えていて、いつか子どもたちのために何かしたい」と

堂を見学した。子どもは2、3人も館」を建設すること。1階はミニユニティスペース、2階が小学生、3階が中学生、4階が若者の居場所。5階を事務所にして屋上では魚を飼い、釣り大会をした

そんな子ども食堂を新型コロナが襲い、活動は一変する。子どもの休校で仕事へ行けなくなった母親らの要請で、緊急支援として弁当を届けるようになった。他にも独り暮らしの高齢者、失業で家賃を払えない人。弁当配達を通じ、困窮者の姿が浮き彫りになった。

家賃補助制度や定額給付金の申請の仕方を教えるなどして、弁当を届けた。不足の経費は寄付や補助金で賄う。5月は1カ月で4千食も配達。そんな経験を重ねて今度は困窮者支援のNPO法人を立ち上げる予定だ。もちろん子ども食堂も続けていく。

子ども食堂を訪れた翌日に足を運んだのは、名護市辺野古沿岸部。ここでは米軍普天間飛行場(宜野湾市)の代替施設の建設が進む。海上にはコンクリートが長く続き、埋め立てられていく。

それを見て初めて、沖縄に来てから一度も米軍の輸送機オスプレイを見ていないことに気づいた。これほど静かな沖縄の空は初めてだ。コロナ禍が影響したのか。前日には、基地に入りする日本人の感染が初めて報告された。沖縄の観光地がにぎわいを取り戻すのはいつだろうか？ 帰り際、やはり

静かな国際通りを見ながら思った。(作家・活動家 雨宮凜)